

2023.01.29 降誕節第6主日 分区講壇交換礼拝  
ルカによる福音書 11:33-36 「あなたの中にある光」

本日の箇所は、11:14の「ベルゼブル論争」からの文脈が続いています。口の利けない悪霊を追い出したイエス様に対し、律法学者やファリサイ派たちが「その御業」に難癖をつけてきました。ある者は「この男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言い、ある者は「(自らをメシアと主張したいのであれば) もっと大きな天からのしるしを見せろ」と求めて来ました。

イエス様の「御業のしるし」を巡って、良い反応を示す人もいました。11:27のイエス様を囲んでいる群衆の中にいた女です。彼女は、イエス様の御業にすっかり魅了され、「この方こそ、イスラエルが待ち望んでいるメシアだ」と思い、「このような方を生んだ母親は何と幸せなのでしょう」と、声高らかに言いました。

しかし、イエス様はこの女を褒めることをなさいませんで、彼女を正しい方向へと導かれます。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」。彼女が羨望していた「メシアの母だから(メシアと肉親だから)」祝されるのではない。また、不思議な御業に魅了されて信じる者が祝されるのではない。神様の御言葉を聞いて、信じ、守る人が祝され、幸いなのです。

そのことの具体例を、イエス様は周りにいた人たちに語られます。それが、31節以降の「南の国の女王の事例」と「ニネベでのヨナのしるしの事例」です。どちらも、神様の御言葉を聞いて、信じた人たちの事例です。31節、「この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである」。「御言葉を聞くために、地の果てから来た」、ここに「御言葉を聞いて、信じる人の態度」があります。32節、悪に満ちていた「ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改め」ました。「御言葉を聞いて悔い改める」、ここに「御言葉を聞いて、信じる人の態度」があります。これら御言葉を聞いて信じた人たちは、終わりの日に裁かれることなく、却って、裁く立場になることが記されています。裁かれることを免れ、幸いに終わる。それ故に「神様の御言葉を聞いて、信じ、守る人」は、幸いなのです。

神様の御言葉を信じる人の“あるべき姿”を、“ともし火”ですとか、“光”ですとか、“明るい”ですとか、“輝き”など、あかりに関する単語をもって、イエス様は教えられます。

「ともし火をともし、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない」。“ともし火”は、御言葉になります。御言葉そのものが光を放ちます。なぜならば、御言葉はイエス・キリストそのものだからです。ヨハネ福音書の

1章 (p. 163)、に記されています。「言」は、イエス・キリストそのものを現します。1:4、「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」とあります。このイエス・キリストの命の故に、御言葉は光を放っている。人間を照らす命の御言葉です。その光が”ともし火”として、今日の箇所では記されています。

御言葉こそ命に直結することが分かります。この命は、今、私たちが生きている命ではありません。ヨハネ福音書1章にあるように、言の内の命、キリストの内の命、永遠の命です。御言葉はこの命に直結するのですね。ですから、11:28、「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人」なのです。イエス様の肉親ならば、永遠の命が与えられるのではない。大々的な「しるし」を見て信じれば、永遠の命が与えられるのではない。御言葉です。御言葉に命があり、その御言葉を、信じ守ることで永遠の命がその人に育まれてゆく。これこそが、幸いなのです。

私たちは御言葉を聞いて、信じて、その御言葉に生きるのです。御言葉に練られる過程を通して御国の相続者・新しいイスラエルへと育まれてゆく。これが御言葉に生きるということです。

その過程は、すべてがスムーズにいく訳ではありません。時に、記されている御言葉から、実際の自分の有様を見せられて愕然とする。御言葉に示される神様の御心から、自分があまりにも遠く離れていることに碎かれる。碎かれることは楽しいことではありません。逆です。ですから、御言葉なるともし火を見ないように、覆いをかけてしまう。

しかし、誰もが「ここ」から始まるのですね。32節にあります「ニネベの悔い改め」、この「悔い改め」は、自分の存在そのものが御言葉によって碎かれるところから始まります。碎かれる、自分が、いかに神様の義しさ（神様の義）から遠くはなれた罪人であるかを思い知らされることです。ここから始まり、御言葉の方向へと体の向きを変え、歩み出す。これが悔い改めです。

悔い改めてからも続きます。歩み出すのはいいけれども、やはり、スムーズにはいかない。一進一退を繰り返します。「ちょっと成長したかな」と思うと、別の時に、また他の御言葉に碎かれる。こんなことの繰り返しです。しかし、だからと言って、ともし火を穴蔵の中や、升の下に置いてはいけません。御言葉から逃げてはいけません。一進一退をしながらも、嫌気がさしてきそうでも、辛くても、ともし火は燭台の上に置きましょう。

パウロの有名な御言葉です。「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。私たちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むことを。希望はわたしたちを欺くことはありません」(ロマ 5:3-5)

p. 279)。このパウロの御言葉からも分かりますように、御言葉によって成長しそうで成長できない一進一退のもどかしさは、わたしたちが御国の世継ぎとして、新しいイスラエルとして養われる上で、必然なのです。苦難・忍耐を通らずに希望へ到達することはあり得ない。これが新しいイスラエル・クリスチャンの歩む道です。ですが、言い換えますと、苦難・忍耐を通っているならば、それこそ、希望に到達する間違いのない道を歩んでいることになります。それ故に、御言葉から逃げることや、離れることがあってはいけません。御言葉に砕かれる連続であっても、それは、運が悪いことでも、神様から見放されたことでもない。それどころか、それは、希望に到達する正しい養いの道のりなのです。ですから、御言葉から逃げることや、離れることがあってはいけません。どんなにダメに見える自分であっても、確かな養いの道を歩んでいるのだから、パウロの言う「苦難・忍耐の時」を歩んでいるのだから、ともし火を上置いていけばいい。ダメなままでも、御言葉に生きて行けばいいのです。

これが、“ともし火”を燭台の上に置いて歩むことです。必ず練られて（練達をとおして）、希望へ到達できますよ。「希望はわたしたちを欺くことはありません」と、パウロが言う通りです。砕かれる連続を経て歩んできた人ほど、希望から欺かれることはない。ですから、ともし火を升の下に置いてはいけません。自分の燭台の上に置いて歩むのです。

ルカ福音書の8章に、有名な「種を蒔く人の譬え」があります（p. 118）。そこには「種は御言葉である」と記されています（8:11）。（先ほどヨハネ1章で触れましたように）御言葉は、人間を照らす命の御言葉ですから、御言葉は、永遠の命という実がなる種ということにもなります。その光り輝く命の種は、人間の心に植え付けられます。この永遠の命の実を結ぶ種が成長すれば成長するほど、今日の箇所34節にあるように、その人の目は澄んでゆきます。すなわち、それは、心の目のことを言っているのですね。「種を蒔く人の譬え」では、「蒔かれた土地の状態」が「その人の心の状態」を表わします。道端の上の心では、種が成長しませんでした。石地の上でも、茨の生い茂った土地でもダメでした。良い土地に落ちた種だけが、永遠の命の種を結んだのです。私たちは心を良い土地の状態にする。そのような人の目が澄んでいるのです。育まれる種は、人間を照らす命の御言葉の種ですから、成長するにしたがって明るさが増してゆきます。「目が澄んでいけば、あなたの全身が明るい」とは、そういうことです。今日の説教題、「あなたの中にある光」になりますね。勘違いしていけないのは、肉による目が濁って見えようが、そんなことはどうでもいいのです。肉による全身の雰囲気は暗く見えようが、どうでもいいのです。そんなことを

言っているのではない。先に申したように、心の状態です。肉の視力によって、単純に確認できるものではない、「見えないもの」です。しかし、神様にはよく見える「澄んだ心の目」「明るい体」です。女優や少女漫画の主人公が持っている大きな澄んだ目は、人間の知るところで、神様はそれを無視されます。大スターやカリスマ性のある人の輝かしい全身をまとうオーラは、人間の知るところで、神様はそれを気にも留められません。神様が顧みられるのは、心の状態・心の目です。心が良い土地ならば、命の御言葉もますます育ち、輝きを増し、全身が明るくなってゆく。目が澄んでゆく。神様は、却って、そのような人を顧みて下さる。繰り返し、そのような人はどんな人なのか。「種まきの譬え」の方が教えてくれています。「良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人」(8:15 p.118)。このような人が、終わりの日に幸いな立場(御国の世継ぎ)に置かれるのですね。

そこで大事なことは、心を良い状態に保つことになります。無論、わたしたちの力では全く不可能です。なぜか。結論から言えば、私たちの自力で、心を良い土地の状態にできるならば、主イエス・キリストが十字架に架られる必要がないからです。元来、わたしたちの心は、悪い状態に傾く傾向があります。種まきの譬えの「道端」「石地」「茨が生い茂る」状態は、放っておかれた人間の心の状態です。このように放置すれば、勝手に悪い状態になってしまうのが人間の心です。自力ではどうしようもありません。私たちは、どうすればいいのでしょうか。

この人間の悲惨な状態を、御父なる神様は憐れんでくださり、御子イエス・キリストをこの世に遣わして下さいました。御父の憐れみの御心は、主イエス・キリストにおいても全く同じで、キリストはこの憐れみによって、わたしたちの悪に傾斜する心、すなわち罪を、御自分の罪とされ、十字架に架られました。このキリストを、「自分を罪から救って下さった救い主」と信じることで、その人は恵みによって、「罪なき義なる人」と見なされます。

恵みによって、義なる人と見なされたのは幸いなのですが、実際の心の状態が伴っていません。あくまでも、憐れみによる恵みによって、義人とされたのであって、まだ、心は、放っておけば悪へと傾斜していきます。

しかし、神様は、それを防ぐ手立てをしっかりと備えてくださっています。聖霊です。神様は、恵みによってだけでなく、実際に私たちの心を良い土地の状態に近づけようとして下さいます。その手立てが、霊において働かれるキリスト、聖霊です。パウロは「聖霊によらなければ、誰も“イエスは主である”とは言えないのです」と言っています(1コリ12:3 p.315)。

すなわち、私たちに信仰を起こさせるのも聖霊、信仰を保たせるのも聖霊、御言葉を信じ、守らせるのも聖霊だということです。心の状態に置き換えて言えば、義人の心に相応しい良い土地へと、私たちの心を耕すのは聖霊なのです。私たちの心がどんなに頑なでも、聖霊による耕作にはかないません。なぜなら、神様は人の心を頑なにもおできになるし、素直にもおできになる全能の主だからです。従って、聖霊が私たちの心を耕しているならば、35節の「光が消えていないか調べること」も、自ずと成されていることになります。

前のページ（p.128）の11：13をご覧ください。聖霊は求めなければ、何にも起こりません。ですから、努めて、聖霊を祈り求めましょう。「あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、天の父は求める者に聖霊を与えて下さる」。このイエス様の勧めに従って、私たちの目が澄んでいるように、心が良い土地であるように、そのために働いて下さる聖霊を祈り求め歩んでまいりましょう。